

これからの TRIZ の方向性

(株)アイデア 桑原正浩 (日刊工業新聞「機械設計」8月号から)

アルトシュラーは、1946年から世界中の特許分析を始め「誰もが優れた発明家になれる」ための理論として TRIZ を作った。現在も、成長している技術分野での優れた特許を約 1 万件分析することで、新しい矛盾マトリックスも開発されている(Creax 社)。

また一方で、ビジネスモデル特許やソフトウェア分野での特許の分析により、今後の「新しい TRIZ」として、大きく 2つの方向性が見えてくる。

一つは、「TRIZ の適用範囲の拡大」である。それは、ビジネスやソフトウェア分野など、今後のイノベーションにおいて重要な戦場になる部分で、TRIZ をどのように使うべきかという本質的な方向性である。一方で、TRIZ だけではなく TRIZ を補完し、技術開発マネジメントのために手法プロセスとして、たとえば原因分析や故障分析などの手法を取り組んだ「TRIZ 版シックスシグマ」とでもいうべき方向性もある。

TRIZ を組織に定着させるために

我々が、色々な企業の創造性強化のお手伝いをさせて頂いていて最大の関心事項は、その活動を如何にして定着させるかである。

パイロットプロジェクトを起こし、核となるメンバーのもとで先行成功事例を作り、社内展開するというのが一般的なシナリオであるが、担当者の配置転換や TRIZ に対する幻想(簡単に驚くアイデアが生まれる)などから、簡単には企業に定着できていない。

物事は何でも、継続させてこそ経験が高まり、組織内の暗黙知が蓄積されて新しいモノが生まれてくるという傾向を持っている。しかし、一発花火だけでその活動を終わらせることはせつかくの種火をいとも簡単に吹き消すことになるのではなかろうか。

<後略>

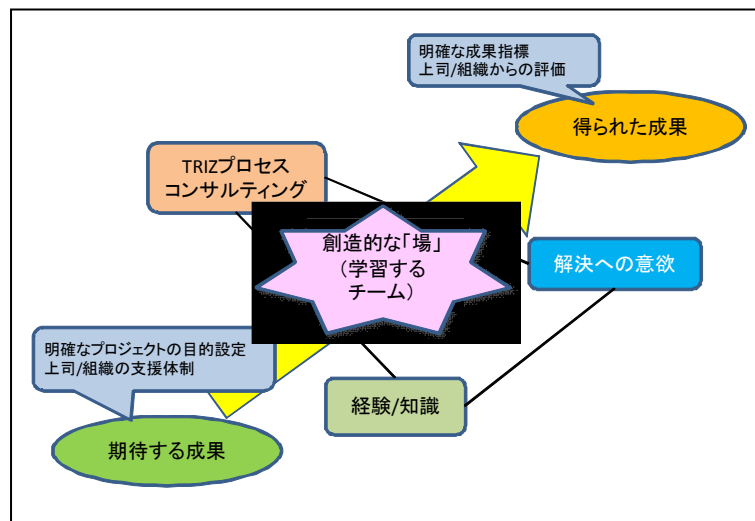


図1 優れた成果を上げるための仕組み